

Book Review

大統領選前後のプーチン氏の人気と 国民との緊張関係

岩尾 大史

国際協力銀行
モスクワ駐在員事務所
首席駐在員（2010年4月より現職）



本書は本年5月にロシアの大統領に返り咲いたプーチン氏の生い立ちから、2000年に大統領に就任し、今年再び大統領に復帰するまでの経緯を、さまざまなエピソードでつづったものである。プーチン氏がKGBからスタートして大統領に上り詰めたことは有名だが、プーチン時代における腐敗や汚職にも焦点を当てている。「第三章 奇妙な儀式」で取り上げられている「国民との対話」と呼ばれる年末恒例のテレビを通じたロシア全国の国民との質疑応答の様子は、実際には事前に質問者・質問内容を決めて入念な準備を経て行われるテレビを通じた巧妙なイメージ戦略であり、「作られた」国民との対話集会みたいなものではあるが、そこで描かれている国民とのやりとりは日本などではみられない興味深いものであり、本書を読み物としておもしろいものになっている。

人気の急変

私たちロシア在住の外国人からみると、下院選挙・大統領選挙前のプーチン氏の人気急変は突如やってきたという印象があった。昨年12月の下院選挙に先立つ11月下旬のこと、ある格闘技戦でプーチン首相が選挙対策のパフォーマンスとしてリング上に上がり、選手を鼓舞するスピーチを行おうとした。そのとき観客席からプーイングが飛び交ったのである。すぐに報道で大きく取り上げられ、プーチン氏を痛罵する風潮が忽然と始まったかのようだった。プーチン氏が9月の与党統一ロシアの党大会で大統領選挙への出馬を表明した後ではあったが、それまでは、プーチン氏を批判する者はいても大衆はおおよそプーチン氏を支持してい



ナポレオン戦争の記念品が数多く展示されるカザン聖堂（サンクトペテルブルク）

ると考えられていた。支持率も高かったし、ロシアに安定をもたらし、高騰した油価のおかげもあるが、経済発展を実現した彼の功績は高く評価されていると考えられていた。そのプーチン氏が厳しい風に曝されたのである。小生も当時はこれが空気が変わるということなのかと思ったほど、なかなか普段は経験できない政治の変動が身近に起こっていることを実感したものである。

そのころ、東京から出張してくる日本のビジネスマンも言っていたことがある。「日本に来るロシア人ビジネスマンも突然プーチン氏を批判するようになった。これまではそんなことはロシア人には怖くてできなかったはずだし、成功しているロシアのビジネスマンは多かれ少なかれプーチン氏の治世の恩恵を被っていたのに、あたかもプーチン氏を批判することがブームになったかのごとくである」と。

しかし、こうした地殻変動はもちろん突然やってきたわけではないとも考えられる。普段は気づかないようなレベルで、市民の間に長期政権に対する不信が芽生えていたのではないか。そういう声は、あまりに小さいので外国人には気づかなかただけともいえる。本書の「第一章 カリスマの凋落」でも紹介されているが、先述した昨年9月の党大会で、メドヴェージェフ大統領（当時）が期待されていた自身の大統領再選

をあっけなく諦め、大統領候補にプーチン氏を提案。直後に同じ壇上でプーチン氏が出馬を受諾するとともに、メドヴェージェフ氏を首相にすると表明。こういうシナリオであろうことは誰もが予想はしていたが、こうもあからさまに権力のたらい回しが行われたことに批判の声があがった。プーチン氏の人気に陰りが生じるきっかけではあったが、それ以上に、自ら掲げた近代化アジェンダに実行力が伴わないと批判されながらも国内リベラル派や西側から期待されていたメドヴェージェフ氏の人気へのダメージのほうが大きかった。

国民の不満

プーチン氏の人気に陰りが生じたことは、必ずしも民主主義をめぐる政治的なアジェンダによるものだけではないことには留意が必要である。経済にも実は原因はある。ロシア国家統計局の統計によれば、プーチン氏の最初の2期の大統領時代（2000～08年）に、公式の貧困ライン以下の生活をしているロシア人の数は、2000年の4230万人から2007年の1870万人へと劇的に減少した。2000年の貧困人口4000万人超という数字は、実に国民の3分の1が貧困層だったことを意味する。

1991年のソ連崩壊前は、特にブレジネフ時代以降は停滞の時期であったが、世界の二大超大国の一方であったソ連は誇り高い国であった。それがソ連崩壊以降の混乱で国民はルーブル危機を含む困難の極みを経験するのである。この当時のことをトラウマに感じているロシア人は多いといわれている。油価の恩恵があったとはいえ、国民経済を立て直し、貧困人口を劇的に減少させたプーチン氏の功績は評価されるべきであ



サンクトペテルブルクを創建したピョートル大帝をたたえつくられた騎馬像「青銅の騎士」



寒さをしのぐ工夫が施されたボルシチ



ロシアの民芸品として有名なマトリョーシカ人形

ろう。しかし2007年以降の5年間、この貧困人口の減少の勢いは急速に停止し、数字は全く動いていないのである。最大の理由は2008年から始まった金融危機である。ロシア経済が金融危機前の経済規模に戻ったのはようやく昨年2011年のことである。しかし、理由はそれだけに帰せられるべきか。そこには、せっかく経済の規模が大きくなって、国民がその活力を経済活動に発揮させる地合いが整ったのに、ビジネス活動を阻害する法制度などの投資環境の不整備、国民の信頼を裏切る恣意的な法運用、公正な経済活動をむしろむすぶ汚職、そして多くの未整備のインフラストラクチャーという原因がなかったか。

貧富の格差が広がり、モスクワでは億万長者の数がニューヨークを超えたといわれているのに、なぜインフラには資金が回らず、これほど貧弱なのか。また、教育、医療・保健制度がソ連崩壊以降悪化し回復が進んでおらず、多くの有能な若者が国に未来を託すこと



サンクトペテルブルクの夜を彩る
ロマンティックなイルミネーション

名越健郎 著
『独裁者プーチン』

発行元◎文藝春秋
発行年月◎2012年5月
総ページ数◎266ページ
価 格◎861円(税込)



ができず、西側に流出していく現実。

国民との緊張関係

プーチン大統領自身、そしてロシアという国そのものにとって、近代化のアジェンダは待たなしの課題である。プーチン氏は3月の大統領選挙の前の3カ月間、ヴェドモスチ紙などロシア主要新聞に政権公約を掲げた。政権公約には選挙目当てのばらまき政策という批判もあるが、資源依存を脱却し、競争力ある産業・インフラストラクチャーを伴った人的資本をひきつける近代化経済の実現という推進すべき課題も取り上げられている。

プーチン氏が大統領に復帰して5カ月が経過し、反政府の抗議運動は収束に向かいつつある。本年9月に開催されたデモは思ったほどの人数を集めることはできず、また、国民の抗議運動に対する賛意もしばみつつある。プーチン大統領の人気も回復に向かっているようである。しかし、国民の広い層の支持を得ている有力な野党も存在しない現状においては、小生の希望でしかないが、政権と国民の間に緊張関係があることが、ロシアの将来にとってよいことだと思っている。今までも多くの政策課題が発表はされてきたが、今までは掲げられても実現せず済まされてきた。しかし、政権と国民の間に緊張関係が生じれば、政策課題の実現にもスピード感をもった取り組みが期待できると考えられるからである。その意味で、ロシアが今後この緊張関係をどう維持し、成果に結びつけられるかが、真の大国としてグローバル経済の一翼を担えるかの鍵を握ることになると小生は考えている。

※掲載写真はすべて、国際協力銀行モスクワ駐在員事務所のジェミシユック・エレナさんが撮影したものです。 ●